



店を出す人も訪れる人も、  
秋空のもと存分に楽しめるように。

松崎は倉吉と鳥取を結ぶ道沿いの、歴史ある宿場町だった。その賑わいのなか、ある市が立っていたのは明治の世以前から。毎年十月の三と八のつく日、収穫の季節を控えて、おもに農具の市だった。太平洋戦争で中断し、戦後再開したが、時の流れには勝てず寂れるいつぼうとなる。「あんなに楽しい市が衰退するなんて……」、人一倍さみしがったのは野口智恵子さん(写真右から四人目)。それもそのはず、生まれも育ちも松崎。あたたかな熱気を肌で感じてきた人だ。

「三八市よ、ふたたび」の声を上げた。すぐに共感の手が挙がる。思いはみな同じだったのだ。ルーツである農具の市ではなく、このまちの商店街の心意気を示す秋祭として再生するのに、さほど時間はかからなかった。推進するメンバーを鬼嫁と名づけたところが秀逸である。気は優しく力持ち。まっすぐ生えたツノのように曲がったことは嫌いだ、思いやりは深い。五人でスタートし、一人を惜しくも病で失ったのち、若い人も加わって現在は六人衆である。個性に富んだメンバーで、町民ミュージカルの実行委員である三津国美枝子さん(写真右から三人目)など、それぞれの特性を生かしたアイデアがあふれる。企画したユニークな鬼嫁コンテストは大評判となりメディアにも多く取り上げられた。

「何よりもこの市は、店を出す人も訪れる人も秋空のもと存分に楽しまなければ」と智恵子鬼嫁の、さわやかな笑顔。

松崎名物三八市実行委員会  
鬼嫁一同

ゆ  
う  
ゆ  
う、  
は  
り  
ま

